

聞き書きで 地域をつくる

～ 聞く人がいて、話す人がいる～



はじめに

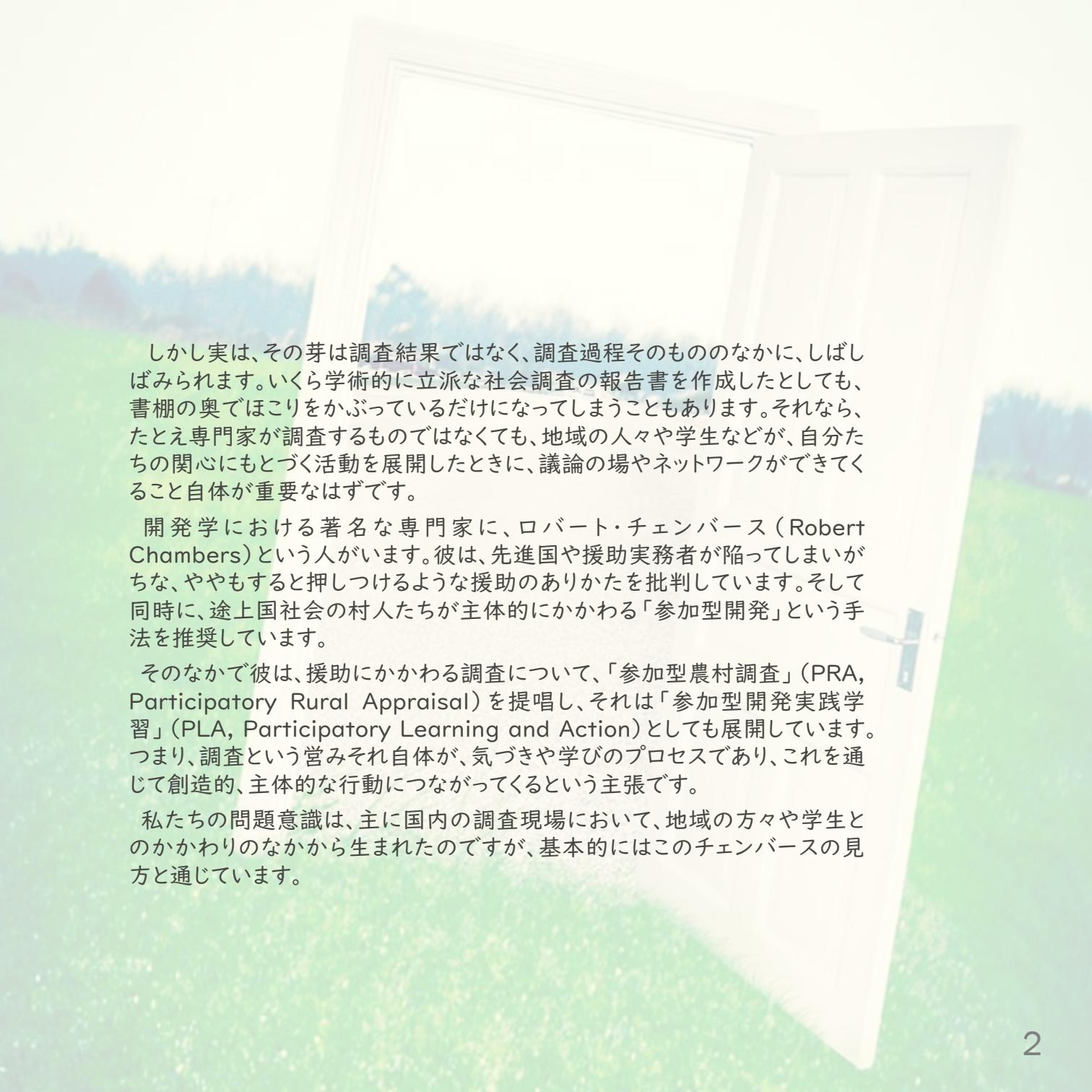
わたしたちは、大学に勤めている社会科学分野の研究者です。ふだんは、あちこちの地域社会において、インタビューや質問紙（いわゆるアンケート）による社会調査を、学術研究として実施しています。

その際、いかに研究目的にみあった調査を設計し、実施するか、また、いかに妥当性・信頼性のあるデータを得ることができるか、そして何を「発見」できたのか、ということに苦心しています。同時に、学生の実習指導として、調査をおこなうこともあります。このとき、わたしたちは調査手法の指導をしている、という意識をもっています。

このような調査を実施しながら、あるとき気がつきました。いや、以前からうすうす感じていたことを、ハッキリと認識するようになった……といったほうがいいのかもかもしれません。

すなわち、調査チームを組んで、地域の方々に関心をもってもらったときに、地域のネットワークができる。調査チームの副産物として、人のつながりができる。そのことが、しばしば調査データや、それにもとづく発見以上に、地域の活性化にとって、とても大切なことなんじゃないか、ということです。

そもそも、わたしたちはなぜ地域調査をおこなうのでしょうか。ひとつには、地域の実情を把握・記録することで、全貌がよくわからない地域の問題が共有されたり、解決へ向けたキッカケとなったりすることを願っているからです。



しかし実は、その芽は調査結果ではなく、調査過程そのもののなかに、しばしばみられます。いくら学術的に立派な社会調査の報告書を作成したとしても、書棚の奥でほこりをかぶっているだけになってしまうこともあります。それなら、たとえ専門家が調査するものではなくても、地域の人々や学生などが、自分たちの関心にもとづく活動を展開したときに、議論の場やネットワークができてくること自体が重要なはずです。

開発学における著名な専門家に、ロバート・チェンバース (Robert Chambers) という人がいます。彼は、先進国や援助実務者が陥ってしまいがちな、ややもすると押しつけるような援助のありかたを批判しています。そして同時に、途上国社会の村人たちが主体的にかかわる「参加型開発」という手法を推奨しています。

そのなかで彼は、援助にかかわる調査について、「参加型農村調査」(PRA, Participatory Rural Appraisal) を提唱し、それは「参加型開発実践学習」(PLA, Participatory Learning and Action) としても展開しています。つまり、調査という営みそれ自体が、気づきや学びのプロセスであり、これを通じて創造的、主体的な行動につながってくるという主張です。

私たちの問題意識は、主に国内の調査現場において、地域の方々や学生とのかかわりのなかから生まれたのですが、基本的にはこのチェンバースの見方と通じています。

それでは、地域の人びとと積極的にかかわり、人のつながりを築くような調査とは、どのようなものがあるのでしょうか。そのひとつとして、本冊子であつかうのが「聞き書き」という手法です。

「聞き書き」とは、その名のとおり「人の話を聞いて、書く」ことです。それだったらインタビューや取材など、あらゆる質的調査がここに含まれるのでは、と思うかもしれませんが、たしかにそういう面もありますが、私たちが注目するのは、まさに「聞いている」現場であり、そこに生まれるつながりです。

「聞き書き」には、「話す人」と「聞く人」がいます。そして一般には「聞く人」が「書く人」、すなわち「発信する人」となります。その書かれたものを「読む人」には、当の「話す人」もがふくまれています。

こんにちの社会では、多くの人びとがSNSなどで自らの考えや経験を「発信する」ことができます。ですから、わざわざこんな面倒なことをしなくてもいいのでは、と思うかもしれません。

しかし、個々人が自分で自分のことについて書くときは、いつ、どこで、何を書いて、どのように発信してもいいでしょう。それはある意味、とても個人的な行為です。一方、「聞き書き」とは、ある場所、ある時間において、誰かと誰かが出会ったことを意味します。まず聞きたい、書きたいという意味をもつ人がいて、そしてそれに応じて、話す人が生まれます。この逆ではありません。



現代の、誰もが好きなように好きなことを発信できる時代においてこそ、「聞き書き」が注目されているのは、そのためではないでしょうか。人は、単に好きなことを話したいのではなく、自分の話を聞いてほしいし、何よりも、他者の話を聞きたい、そのことによって他者とつながりたい、と思っているものだからです。そして私たちは、この「聞き書き」がもつ、人と人が出会い、つながるという力が、地域づくりに役立つのではと考えています。

「聞き書き」につながる「オーラルヒストリー」の手法は、従来、歴史学や社会学研究の中で、抑圧され、記録を残せずにいた人びとの様相を明らかにするために使われていました。また、教育現場においては、戦前から「生活綴方運動」などで「聞き書き」の手法に近いものが導入されていました。小学生から大学生まで、若い世代による実践も多く、聞き手にとって学びが多いという教育効果が論じられ、アクティブラーニング、総合学習、国語教育などで実践されています。

本冊子では、このような教育や研究手法としての意義だけでなく、「聞き書き」が地域社会の活性化に資するだろう、ということを念頭に置いて、その具体的な方法や、事例を紹介していきます。

1

テーマを定める

聞き書きの多様な目的

「聞き書き」で何を聞くのか。それは、その目的によってさまざまです。

たとえば孫がおじいさん・おばあさんに話を聞けば、それは家族の記録を残すことになるでしょう。しかし、それは同時に、ある時代・ある地域の食べ物や暮らしなどの生活史を掘りおこすことになります。

- ✓ 家族の記録
- ✓ ある時代のくらしの記録
- ✓ 地域の記録
- ✓ 仕事・産業の記録
- ✓ 文化の保存
- ✓ できごとの記録



また、衰退しつつある仕事のやり方、お祭りや行事の方法、ふだん使っていたことばや生活習慣といった多様な文化は、ほうっておけば何の証拠も残さないまま消えてしまいます。それらの記録を残すために、具体的なテーマを決めた「聞き書き」もできます。

さらには、ある地域で起きた事件、災害が、その地域の人びとによってどのように経験されたのか、さまざまな角度からの記憶を残すこともできます。それは、歴史資料として貴重な記録となります。





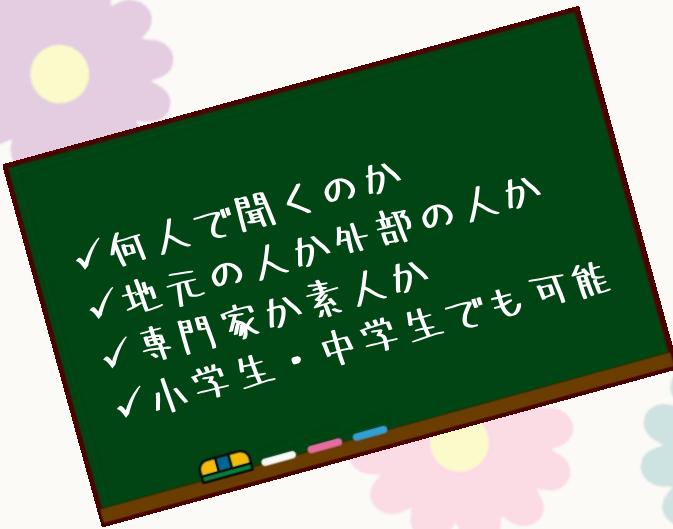
2

だれが聞くのか

よそ者・若者？

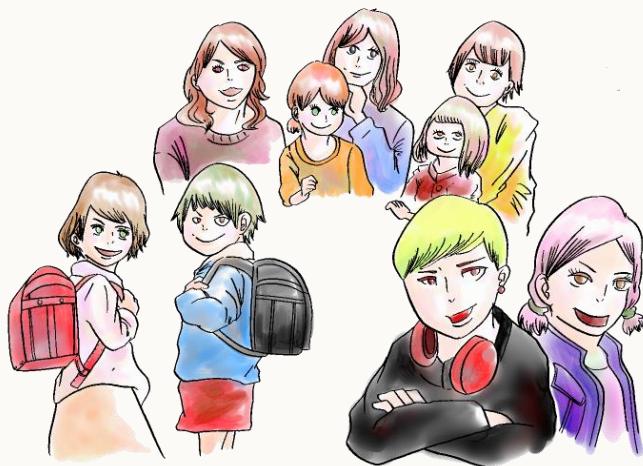
「聞き書き」をしようと思ったのが、まずはあなた1人でもかまいません。

少し時間がかかるかもしれませんが、一緒に聞いてくれる仲間をつのり、考えを共有していけば、「聞き書き」をプロジェクトとして立ちあげることができるでしょう。

- 
- ✓何人で聞くのか
 - ✓地元の人か外部の人か
 - ✓専門家か素人か
 - ✓小学生・中学生でも可能

「聞き書き」は小学生・中学生にもできる活動です。

つまり、「聞き手」はかならずしも調査の専門家でなくていいのです。地元のことをよく知らない、外部の人が入ったほうがよい場合もあるでしょう。



話すテーマについてよく知らない「聞き手」が発する素朴な質問によって、「話し手」は自分の経験をあらためて思い出したり、見なおすきっかけになります。話す側にとってあたりまえだったことが、「聞き手」にとっては何もかも新鮮で、驚きの連続であること、それ自体が「話し手」にとっても、発見になります。

3

コーディネーター

聞く人、話す人をつなぐ

複数の「話し手」と「聞き手」がいる「聞き書き」を組織するためには、**コーディネーター**が必要になることもあります。もし、「若者・よそ者」が「聞き手」になるのであれば、なおさら地元のことをよく知る人に、あいだに入ってもらう必要があるでしょう。

そのようなコーディネーターの役割は、学校やNPOなどがなうこともありますし、行政や企業などと協働して、組織を立ちあげてもよいでしょう。

- ✓ 必要なのは「聞き手」と「話し手」だけではない
- ✓ コーディネーターを作ることがす
- ✓ 行政とのかかわり

特に地域の行政組織と何らかの協力関係が築ければ、ある種の「お墨付き」を得られたことになります。「話し手」さんたちも安心できるでしょうし、さらにいろいろな人たちを巻きこみやすくなるかもしれません。

その一方で、さまざまなしがらみも生じますので、メリットデメリットについては、目的、テーマや考え方次第です。



地域の資源を見つめなおす

テーマとコア・メンバーが決まったら、次は、**誰に聞くか**です。誰にお願いするかによって、得られる情報が変わってくるので、とても重要なポイントになります。

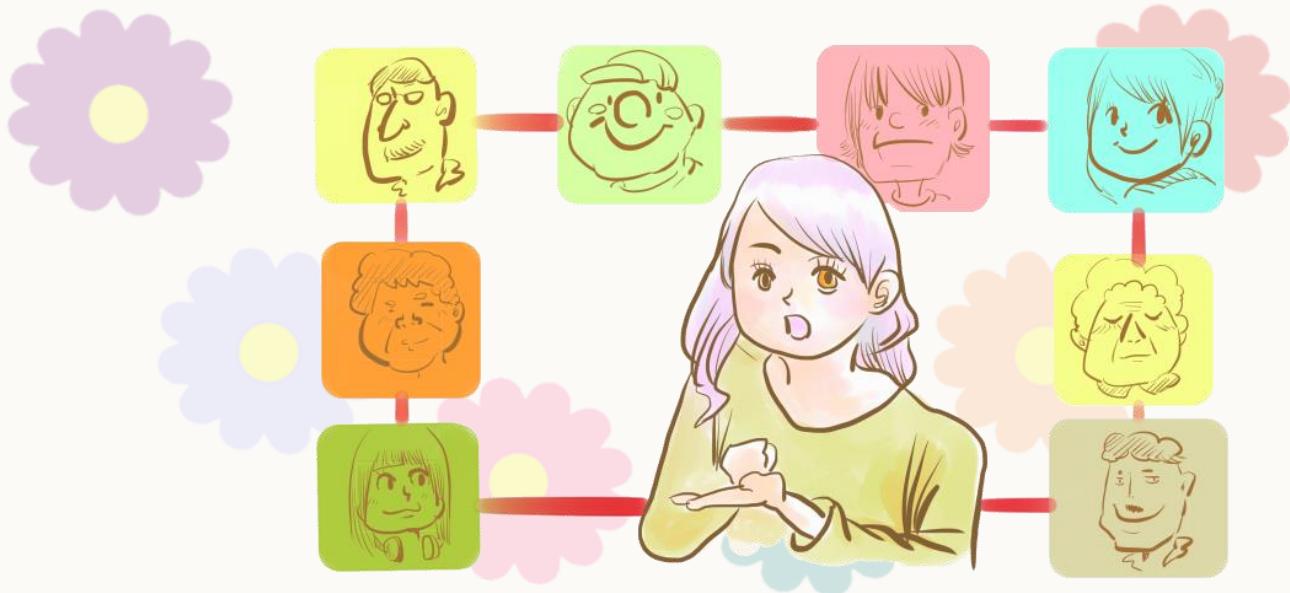
テーマによっては、聞く対象が限られていたり、具体的な語り手の人物像をすでに思いえがいているかもしれません。また、ある時代のある地域の生活などについて知りたいなら、かなり多数の候補者がいるかもしれません。あるいは、そもそも候補者がいるのかどうか、見当がつかない場合もあるかもしれません。

- ✓何が知りたいかによって、誰に聞くかも決まる
- ✓どういう「話し手」がいるのかの発掘が、すでに「聞き書き」の活動に

喜んでいろいろ話してくれそうな、頼みやすい、身近な人からはじめる「聞き書き」であれば、やりやすいでしょう。

しかし、それだけでなく、頼みにくい人や、まだ知らない人のなかに、重要な「話し手」になってくれる人がいるかもしれません。

地域のネットワークを利用して、情報のアンテナを広げてみましょう。誰に聞けば、どんな話が聞けそうなのか、それを周囲にたずねていくとき、すでに「聞き書き」ははじまっています。なぜなら、その過程で事実の発見があり、人と人とのつながりが見え、さらなるつながりが、あらたにつくられるからです。



5

お願いする

アポイントメントをとる

「話し手」となる候補者に**依頼する**とき、まず、この「聞き書き」がどのような目的でおこなわれるのか、という趣旨を十分に説明する必要があります。

特に、その公開のしかたについて、あらかじめ十分に説明し、納得していただいはじめて、「話し手」さんになっていただくことができます。

「聞き手」の都合を押しつけないこと、「話し手」さんの意志を尊重すること、それがあらゆる活動の原点になります。

- ✓趣旨説明
- ✓日時・場所・人数・所用時間
- ✓公表のしかたの説明
- ✓十分に納得してもらったつもりでも、途中で断られることも
- ✓「聞き手」の都合をおしつけない



「聞き書き」する場所は、「話し手」さんにとっておちつける場所、そのテーマにとってゆかりのある場所での実施することが理想でしょう。その場でいろいろと思い出したり、そこにあるものや風景などから、「聞き手」もいろいろな質問がしやすいからです。

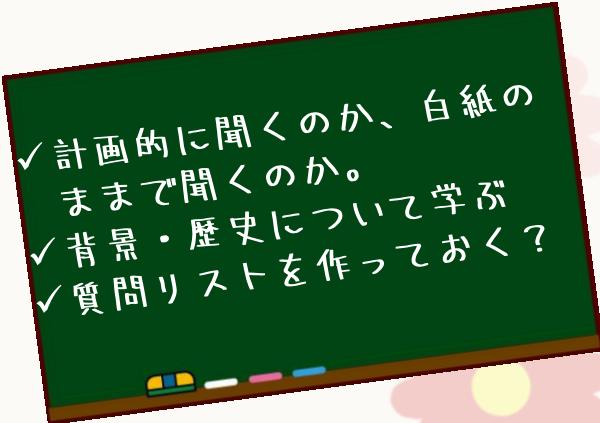
インタビュー当日までの準備

さあ、「話し手」と「聞き手」が決まりました。じゃあさっそく会って話を聞こう!

いやいや、ちょっと待ってください。

「何も知らないことで、新鮮な質問ができることもある」と書きましたが、何の準備もしないでただ聞きに行っても、いい質問はできません。

「話し手」さんが何を話してくれるかは、「聞き手」次第です。特に、人に話を聞くことに慣れていないのでしたら、よい「聞き手」になるための**準備**が必要です。

- 
- ✓ 計画的に聞くのか、白紙のまま聞くのか。
 - ✓ 背景・歴史について学ぶ
 - ✓ 質問リストを作っておく?

メンバーと一緒に、どんなことを聞くのかを相談し、手わけしてテーマの背景や歴史について、図書館やネットで検索し、年表などをつくってまとめておきましょう。あらかじめ地域の下見に行って、気づいたことを共有するのもオススメです。これらの事前準備によって、「聞き手」メンバーの意識も高まり、「チーム」として聞くことができるようになります。

ただし、あらかじめ綿密に調べ、沢山の質問をリストアップしてしまったことで、当日はそれを一生懸命聞くだけになってしまうこともあります。それでは、どんどんやり取りが広がるような、その場ならではの面白い話が聞けなくなってしまいます。

「聞き書きの現場には、質問リストをもって行く。でも、現場ではリストは見ない」、そんな方法もあります。





「聞く」ための心構え

わくわくするために

準備することのもうひとつの利点は、聞きたいテーマについて、そして何よりも、これから会って話を聞こうとする人に対して、どんどん興味をもてることです。

当日、「話し手」さんは、自分の話の何が面白いのか、何を伝えればいいのか、と、不安なこともあります。一方で、「聞き手」は、「話し手」さんが歩んできた人生の経験や生活を、他者に伝えるために編集し、書く、という責任を負うのですから、とても緊張したりします。

しかし、あんまり緊張しすぎて、「話し手」さんとのあいだに「壁」をつくらないようにしましょう。そのために、「聞き手」は敬意を払い、節度を保ちつつも、「話し手」さん自身や「話し手」さんのもつ歴史や文化に積極的に関心・好奇心をもって距離感をちぢめていきましょう。

「聞き書き」は、ひとつとして同じではありません。同じ「話し手」さんに別の日に話を聞きに行っても、同じことが聞けるとはかぎりません。別の場所で別の人が同じ人に聞き書きをしても、中身はまったく違うものになるかもしれません。ふだんから接していた知り合いであっても、「聞き書き」の時にはじめて聞く話があったりします。

このような、一回一回が異なる、かけがえのない経験を共有した、ということが、聞いて・書く人と、話す人をつなげることになるのです。

だからこそ、その一度きりのために、**わくわく**しておきましょう。



人数・組み合わせ

- ✓おしゃべりな「話し手」と「聞き手」の方がいい？
- ✓「話し手」と「聞き手」はそれぞれ1人がいいのか複数がいいのか

さあ、いよいよ、「話し手」と「聞き手」が会う「聞き書き」当日になりました。

「話し手」さんも、実は「聞き手」も、話すのがあまり得意ではない場合は、最初は会話もぎこちないかもしれません。

それでは、おしゃべりな「話し手」と、聞き上手な「聞き手」のほうがかうまくいくのでしょうか。そうでもないのです。

おしゃべりな「話し手」さんは、「聞き手」の質問をおかまいなしに話してしまったりします。同じことをくり返し語っている「語り部」のようになっている人は、「できあがった話」「いつも同じ話」をしてしまうこともあります。

「話し手」と「聞き手」の会話のキャッチボールのためには、「聞き手」も、質問ばかりではなく、少し**自分の話**をしたりすると、「話し手」さんも親しみを感じてくれるかもしれません。



「話し手」さんが複数がいると、おたがいが影響しあうバイアスが生じるので、1人ずつ話を聞くことが多いですが、複数の方々がいるとリラックスして話が盛り上がり、記憶をたどりやすくなることもあります。ただし、録音（後述）を聞きなおすのは大変になります。

「聞き手」も、1人でもいいですが、**2~3人**でもいいでしょう。同じ「聞き書き」をやったはずなのに、面白い！と思うところが全然違うこともあり、「聞き書き」の奥深さが実感できます。ただし、役割分担や質問を聞く順番は、あらかじめ一緒に聞くメンバーで相談・共有しておきましょう。

「聞き手」が4人以上になると、講演や説明のようになりがちなので、あまり大人数でおしかけるのも望ましくないでしょう。

インタビューの技術と道具

現在、インタビューにおいて、**ICレコーダー**の使用は必須だと思われています。あとで編集する際に聞きなおせるし、その場で聞きのがしたこと、あいまいだったことを確認できるし、「メモをとるのに必死で話に集中できない」といったこともなくなります。

しかし、今一度、それがもたらすデメリットも確認したいです。ICレコーダーに頼らないで、聞き書き作品をしあげること也不可能ではありません。

まず、「話し手」さんには、録音・録画することについて、かならず許可をとる必要があります。しかし、そのことが「話し手」さんを緊張させ、本音を話してくれなくなることもあります。また、「聞き手」の注意が散漫になることもあるでしょう。



また、ICレコーダーをもちいる場合でも、当日の**ノート・テイキング**は重要です。話の流れをさえぎらないために聞かなかったこと、話を聞きながら出てきた疑問点をノートに記しておけば、インタビューの最後にその場で確認できます。

重要な数字や事実だけでなく、「話し手」さんの印象深かった語り口そのままを、書きとってみましょう。「話し手」さんが言いよんだり、饒舌だったりした箇所、表情や沈黙など、当日にしか得られない臨場感にもとづいた、ことばだけでなく（非言語の）情報も記しておきましょう。

これらのノートを見かえすことで、現場で、自分自身が特に何に関心を持ち、何を印象深く感じたのかの確認にもなります。



聞いたら、書く。 書くために、また聞く。

- ✓書くために、もう一度じっくり聞く
- ✓できる限りありのまま、書き写す
- ✓確認のために、「話し手」さんを再訪することも

緊張もしたけど、とても面白い話がきけて楽しかった「聞き書き」当日が終わりました。しかし、実は、「聞き書き」はここからが本番です。

聞いたら、書く。その作業のはじまりです。

そのコツは単純です。インタビューが終わったらすぐにICレコーダーおよびノートから、データを起こす作業をはじめることです。このための十分な時間をあらかじめ確保しておきましょう。

当日のインタビューを録音・録画していたとしても、そのまま公開するわけではありません。どのようにまとめるかが、「書く」、つまり公開方法に直接かかわってきます。音声・映像による「聞き書き」作品もありえますが、ここでは、特に、「書く」ということを中心に考えていきましょう。

当日にとったメモを参考にしつつ、もう一度、録音を聞きなおしてみましよう。そしてすべての発話を書きおこす作業に挑戦してみてください。それは、「**ベタおこし**」、社会科学分野では「トランスクリプト」といわれるものですが、できるかぎりありのまま、「聞き手」や「話し手」の言い間違いや口ぐせ、笑い声、方言なども、そのまま書いてみるのです。

最初は1分の録音を書きおこすのに、10分以上かかるでしょう。大変な作業ですが、真剣に聞きなおすことで、当日は緊張していたり、他のことに気をとられていてよくわからなかった大事なことや貴重な話の意味が、あらためて理解できます。

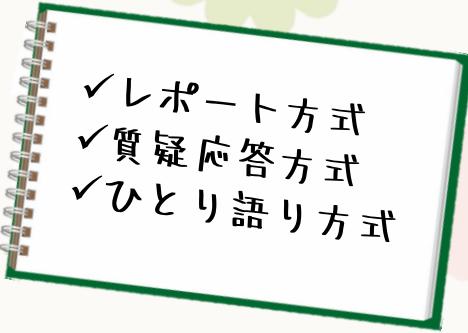
その中で、何度聞いても理解できない部分や、発言が重なってしまったり聞きとれない部分、固有名詞や表現がわかりにくい箇所などが出てきます。また、「話し手」さんの記憶違いや、言いたくないことを隠したりすることも当然ありえます。これらをどのようにあつかうのか、検討しなければなりませんし、資料などで裏付けをとる必要もあります。

情報について「話し手」さんに直接確認したり、追加インタビューのために再訪することも重要です。

このように訪問をくり返すことで、「話し手」と「聞き手」の距離感もぐっとちぢまるかもしれません。



「作品」としてまとめる方法

- 
- ✓レポート方式
 - ✓質疑応答方式
 - ✓ひとり語り方式

「ベタおこし」は、それだけで貴重な資料となりますが、読みにくい
ですし、何より長すぎます。それを、読みやすく、楽しい、みんなが読
みたくなるような「**作品**」にしていきましょう。

「ベタおこし」から「作品」にまとめる方法には、いくつかあります。
まず、「聞き手＝書き手」が主人公になって、「話し手」の語りの内
容全体をまとめ、「聞き手＝書き手」がそれをどう思ったかを書くよ
うな、感想文／レポート形式もあります。

しかし「聞き書き」の臨場感が「読み手」に伝われば、「読み手」は、「一度限りの経験」を、追体験することができます。

そのような臨場感をそのまま伝えるために、「聞き手」と「話し手」のやりとりを、質疑応答の形でまとめるやり方もあります。ただし、この質疑応答形式は、あまり読みやすくないので、特に重要なところを選んで小見出しを入れたり、会話の順番を入れかえたり、といった、相当の「編集作業」が必要です。

また、あえて「聞き手＝書き手」の質問部分を消して、「ひとり語り」の形式に編集しなおす手法も、よく使われます。「話し手」のいきいきとした語り口はそのままに、しかし、作品の主人公は1人になるので、読みやすくなります。

この形式も、質問部分をうまく語りのなかに組み入れるなど、「編集」の腕が問われます。話しことばのリズムを大事にする句読点の打ち方、漢字の使い方などにも、注意が必要でしょう。

気をつけなくてはならないこと

「聞き書き」を作品としてまとめる過程で、「話し手」さんには、内容について確認してもらう必要があります。

その際に気をつけなくてはならないことが、いろいろあります。

- ✓ 「話し手」さんの名前や写真を、出すかどうか
- ✓ 「話し手」さんやご家族の意志の尊重

まず、「話し手」さんの名前は実名にしたほうがいいでしょうか。それとも、N.S.さんや佐藤さん（仮名）のように、イニシャルや仮名をもちいるべきでしょうか。顔写真はどのようにでしょうか。

これらは、考え方によります。実名と顔写真が出ることで、実在する人物としてのリアリティがより読者に伝わります。しかし、実名や顔写真を載せることに抵抗がある人もいますし、実名が出るのが前提になっていると、本音での話ができないかもしれません。

また、ご本人が一度実名を出して「話し手」になることを了承したとしても、「話し手」さんから大幅な修正要求がでることや、公開を辞退されることも珍しくありません。「私は、こんな風に話したつもりではなかった」「よくまとめてくれたが、家族が公開に反対している」と、いうことがしばしば起きるのです。



誤解が生じないように、あらかじめお願いするときに説明しておく必要があると、前に述べました。しかし、そういった手続きを経ても、こうした事態は起こりえます。

特に、方言やその人特有の表現をそのまま収録することで、「聞き書き」作品をいきいきとしたものにしたいですが、「話し手」さんにチェックをお願いするとき、「話し手さん」が親切心からそれらをすべて「標準語」にしてしまう、ということもよくあります。

そういうとき、「話し手」さんには趣旨をあらためて説明して、納得してもらうこともできますが、最終的には、掲載の可否をふくめ、**「話し手」さんの意志**を尊重しなくてはなりません。

成果の公表のしかた・ 保存のしかた

「聞き書き」をプロジェクトとして進める時に考えなくてはならないのが、**資金・予算**の問題です。「作品」としてまとめるのは、それを公表するためですが、そのためにはお金がかかるからです。

どのくらいの資金が必要で、その資金をどこから獲得するのか。このような議論・交渉をするのは大変なのですが、実は、それも、「聞き書き」が地域の活性化に役立つ理由のひとつでもあります。

「聞き書き」という活動や、その成果を作品にして公開することが、地域にとって意義がある、と、あちこちに説得することで、はじめて何らかの予算がつくからです。そこにまた新たなつながりができてきます。

- ✓文字として書くのか、
声や映像を編集するのか
- ✓紙媒体か、ウェブ上に
アップするのか
- ✓デジタルデータをどこに
保存するのか



まず、その成果を文字で「書く」ことで編集するのか、「声」として、さらには「映像」として編集するのか、という問題があります。

「書く」場合には、それを冊子や報告書として、紙媒体にまとめて刊行するのか、ウェブ上にアップするのか、という選択もあります。最近では、文字であっても音声・映像であってもデジタル化されていますから、ウェブ上で公開の場合も多いかもしれません。

しかし、ウェブ上で公開するのは便利なようで、どこの媒体に置いておくのか、その媒体をどのように管理するのか、という問題があります。

また、これらの編集されたデータ、さらには、「聞き書き」の現場を録音・録画した「生」のデータを、どこで、いつまで保存するのか、という問題があります。デジタルデータの保存と活用の問題は、議論がはじまったばかりです。

多様な効用

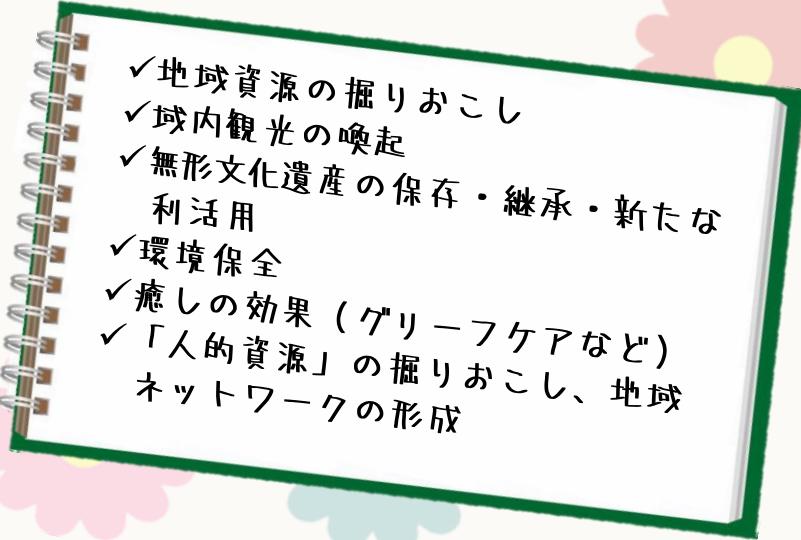
ここで、もう一度、「聞き書き」に何ができるのか、その効用を確認したいと思います。特に、「**地域づくり**」のためにどのような効用があるのでしょうか。

現代社会において、生活文化の継承は難しいことが多いでしょう。そのような失われゆく生活・記憶や技術を、せめて語り伝えることができた、ということが、「話し手」にとっての癒しになりえます。自分の人生を他者に聞いてもらうこと、それ自体の癒し効果については、末期の患者のグリーフケアに「聞き書き」の手法が使われる事例があることからもうかがえます。

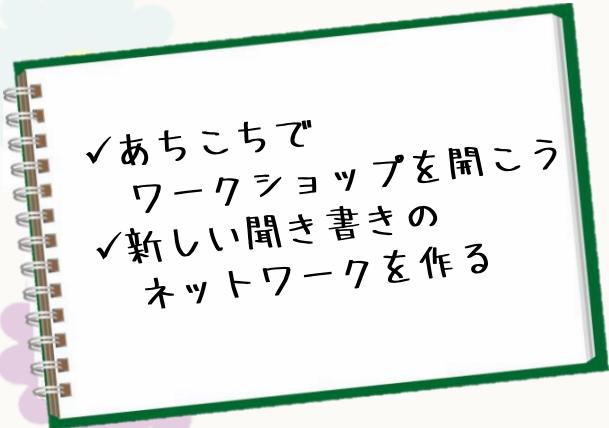
また、失われゆく生活知のなかには、その地域の「環境」もふくまれます。かつて人びとがどのように暮らしのなかで自然を活用し、共生してきたのか、今、そのような知恵が失われていないのか、失われた結果どのような問題が起きているのか、などの気づきを得ることもできるでしょう。

そして、これらの語り伝えられた物語は、地域の活性化にとって「資源」となります。地元の人びとがその価値に気づくだけでなく、外部の人びとへのアピールになりえます。現在多くの自治体はその活性化を試みている観光振興政策にも、資するところは大きいでしょう。

「資源」という意味では、「聞き書き」は、地域の人的資源の掘りおこしにもっとも効果を発揮します。「聞き書き」に参加した人たちは、他者に真剣に向きあい、地域の文化を深く知ることになります。そのことが、地域社会の人のネットワークを深め、地域の活性化に直接つながることになるのです。

- 
- ✓ 地域資源の掘りおこし
 - ✓ 域内観光の喚起
 - ✓ 無形文化遺産の保存・継承・新たな利活用
 - ✓ 環境保全
 - ✓ 癒しの効果（グリーンケアなど）
 - ✓ 「人的資源」の掘りおこし、地域ネットワークの形成

完成してからが「はじまり」

- 
- ✓あちこちでワークショップを聞こう
 - ✓新しい聞き書きのネットワークを作る

「聞き書き」を作品としてまとめ、編集し、成果を公表するところまでようやくたどりつきました！その達成感は何にもものにも代えがたいと思います。

しかし、作品が完成したら、それで終わりではありません。「はじめに」でも書いたとおり、せっかくすばらしい調査をしても、書棚でほこりをかぶっているには意味がありません。何よりも、「聞き書き」をやっていく過程で、人びとが出会い、説明し、議論し、話を聞き、書くことで、大きなダイナミズムが生まれつつあるのです。この流れを利用しましょう。

「聞き書き」の成果が地区内で**読まれること**で、地域の魅力、資源が共有され、地域づくりへの動力源となっていきます。一度きりのお披露目会だけでなく、ふり返りの座談会やワークショップを、あちこちで開いてみてはいかがでしょうか。

そこから、あらたなテーマ、あらたな出会い、あらたなつながりが生まれ、そしてそこからあらたな地域の活動が立ちあがるかもしれません。



作品活用のアイデア

おそらく、ほとんどの「聞き書き」活動では、成果物は一種類かと思いますが。多くのプロジェクトでは、企画の立ちあげ、インタビューの実施、編集作業でエネルギーを使いきってしまい、「**成果物の活用**」までは、アタマがまわらないかもしれません。

しかし、「活用」という観点からみれば、もっといろいろな可能性があります。「聞き書き」活動の成果物を、その後、どのように活用できるのか。

「聞き書き」をはじめるとき点で、そのことをあらかじめ考えたプロジェクトにしたり、今後の活用についてに特化した「活用班」のようなメンバーを編成してもいいかもしれません。

- ✓写真や新聞記事などの資料を集め、整理する
- ✓マップや年表を作成する
- ✓副教材、カルタ、街かどに提示・・・

まず、「話し手」さんの語りの意味をよりわかりやすくするために、当時の写真や新聞記事などの資料を、刊行する冊子に取り入れたいところです。そのことで、より当時の様子がつかめて楽しい作品になります。「聞き書き」プロジェクトと並行する形で、これらの資料を「話し手」さんや他の方々の協力を得て集め、整理してみましょう。



また、「聞き書き」作品と同時に、またはそれをもとに、当時の商店街マップ、地域の年表などをつくることもできます。

成果物を複数にすることを考えてもよいでしょう。幼稚園での読み聞かせ用、小・中学校で地域史を学ぶための副教材、大人も子どもも遊べるカルタ…。

アイデアは、それぞれの地域できっと、いろいろ浮かぶのではないかと思います。是非、「聞き書き」をきっかけとして、たくさんのアイデアを、地域のみなさんで、議論し、実践してみてください。



CASE-1 会津の小中学生による 「聞き書き」の出版

福島県の会津地方は、山深い豪雪地帯であり、独自の歴史意識が強い地域です。その中でも、只見川電源流域進行協議会構成町村（柳津町、三島町・金山町・昭和村・南会津町・桧枝岐村・只見町）において、小・中・高校生が聞き書きを実践しています。



その方法は身近なお年寄り、特に祖父母に対して、一枚の写真を見せてもらい、そこから話を聞く、というものです。それらの「聞き書き」は、写真とともにまとめられ、『奥会津 こども 聞き書き百選』として、2009年から2018年までに全10巻が刊行されています。一枚の写真そのものだけでなく、そこから思い出される当時の暮らしがいきいきと語られる様子が、こどもたちの自由な方法でまとめられています。2019年には、10年間の聞き書きに追いかけて取材を加えた『聞き書き 十年の軌跡』が刊行されました。

刊行元の奥会津書房は、会津地域の文化の掘り起こしと発信をテーマに1998年に設立されました。そこで2015年まで刊行されていた雑誌『会津学』にも、数多くの「聞き書き」作品が掲載されています。

農山村は高齢化が進み、奥会津ももちろんその例外ではありません。しかしそれは、その地域に暮らし、かつての生活の知恵を身につけていた人が、ごく身近に沢山いるということでもあります。「聞き手」である子どもたちと、「話し手」である大人たちをつなぎ、土地の歴史や文化を記録する手法として、「聞き書き」は大きな役割を果たしています。

【遠藤由美子】



只見川電源流域振興協議会 <http://www.okuaizu.net/>

『じいちゃんありがとう～一枚の写真から～ 奥会津子ども聞き書き百選』
1～10巻（2009～2018）奥会津書房

『聞き書き 十年の軌跡』（2019）只見川電源流域振興協議会編 奥会津書房

CASE-2 「聞き書き甲子園」と 「共存の森」

「聞き書き甲子園」は、2002年、林野庁と文部科学省の主催で開催された「森の“聞き書き甲子園”」をきっかけに、現在は、農林水産省、文部科学省、環境省と民間団体で組織する実行委員会が主催する活動です。実行委員会の一員であるNPO法人共存の森ネットワークが運営事務局を担っています。

毎年、全国の高校から応募してきた100人の高校生が、まず東京で事前研修をしたのちに、日本じゅうの森・川・海の名人のところにおもむき、名人たちの働く技、知恵、ものの考え方、生き方について「聞き書き」を行い、それらを作品集にまとめ刊行しています。年度末にはフォーラム（成果発表会）も開催しています。そして「聞き書き」を経験した高校生たちは、翌年度以降参加する高校生の研修やフォーラムの運営もサポートしています。

「聞き書き甲子園」では、聞き手（高校生）と話し手（名人）は一對一で出会います。対話を録音したデータは、一字一句、書き起こしますが、その過程で聞き手（書き手）は、何度も繰り返し、話し手の言葉を反芻するのです。ある高校生は言いました。



名人の話は、いつの間にか、
自分が言いたい（伝えたい）
ことになった。

名人が語る人生や仕事の話は、高校生にとって、はじめは「他人ごと」です。しかし、作品をまとめる過程で、相手に対する敬意や共感とともに「自分ごと」に変わる瞬間があります。その結果、高校生と「名人」は、本当の祖父母と孫のように深い絆をもつこともあります。「森が泣いている」「村が寂しくなった」と語る「名人」やその地域のために何かしたいという思いから、里山里海の保全や地域活性化などに取り組む学生たちの活動も生まれました。その後、社会人となり、農山村地域にI・Uターンする若者も増えています。

「聞き書き甲子園」は、祖父母の世代から孫の世代へと、その知恵や技のみならず、心をつないでいく活動です。

【吉野奈保子】



「聞き書き甲子園」は、2019年度より、名人の推薦と高校生の受け入れに協力する市町村（地域）を公募し、実施します。

詳細は、公式サイト <https://www.kikigaki.net> をご覧ください。

CASE-3 豊田市足助地区の あすけ聞き書き隊

あすけ聞き書き隊は、愛知県豊田市足助地区で聞き書き活動を継続的に行っている団体です。豊田市役所足助支所が開催した『聞き書き講座』の受講生が集まって、平成24年3月に結成しました。NPO共存の森ネットワークの指導を受け、足助で暮らしてきた80歳前後の方々から、仕事、生活、考え方などのお話を伺って、方言を活かした語り口調でまとめています。

毎年、豊田市の地域活動支援制度である『わくわく事業』を活用し、『足助の聞き書き集』を発刊しています。第1集～第6集で総勢58名のみなさんの生き様を収録しました。初版分は足助地区内の自治会、小中学校、図書館、各施設などに配布していますが、購入したいという声を多数いただいたので、販売用に増刷しています。





話し手の娘さんから「とじこもりの父の生活に新しい風を入れてくださってありがとう」というメッセージをもらったことがあります。「あの本は面白いね!」、「毎回楽しみにしているよ!!」と直接声をかけてくださる愛読者も増えてきました。聞き手には中学生、高校生をはじめとした若手や豊田市外からの参加もあり、世代と地域の広がりがあります。足助地区という小さな範囲での活動ですが、人と人とのつながりを深め、歴史を紡ぐ役割を果たしています。

聞き書き集がきっかけとなり、新たな広がりも生まれました。市町村合併10周年記念に制作されたドキュメンタリー映画『産土(うぶすな)』豊田篇で、第4集の話し手が取材されました。長年暮らした土地は土砂崩れで住むことができなくなり移住されましたが、その後も住み慣れた地に通い、炭焼きを続けている方です。

聞き書き作品から、かつてこの地で行われてきた生業、伝統行事、地域づくりへの取り組みを振り返ることができます。そこには地域活性化のヒントがあります。過去を残すだけでなく、未来へつなぐ活動です。私たちは、そんな思いを持って聞き書き活動に取り組んでいます。

【高木伸泰】

あすけ聞き書き隊 <http://asukekikigaki.booo-log.com/>

CASE-4 山里の聞き書き

特定非営利活動法人として、「聞き書き」を展開している山里文化研究所は、岐阜県中津川市で、2008年11月に設立されました。

山里の魅力を発見し、そこから学び、伝えることをテーマとして活動する中で、2008年から「山里の聞き書き」を行ってきました。農山漁村の小地域で15人ぐらいの話し手さんに15人ぐらいのヨソモノが各自話を聞くという、交流も兼ねています。

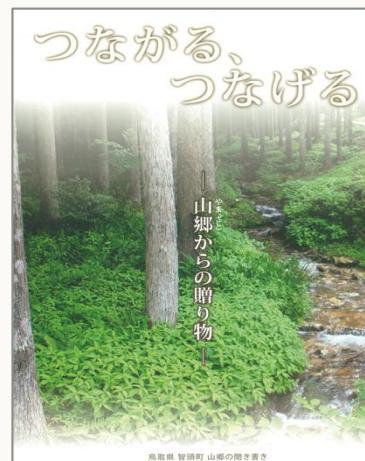
基本方針は、以下のようなものです。

- ①名もなき地域、名もなき人に新しい光を当てる
- ②書籍を刊行して地域にお返しする
- ③学びの場とする

(*「名もなき」というのは「普通の」というような意味)

スタートから書籍刊行まで約7カ月が標準。ワークショップによる仲間同士(聞き手)の「学び合い」のメソッドが特徴です。

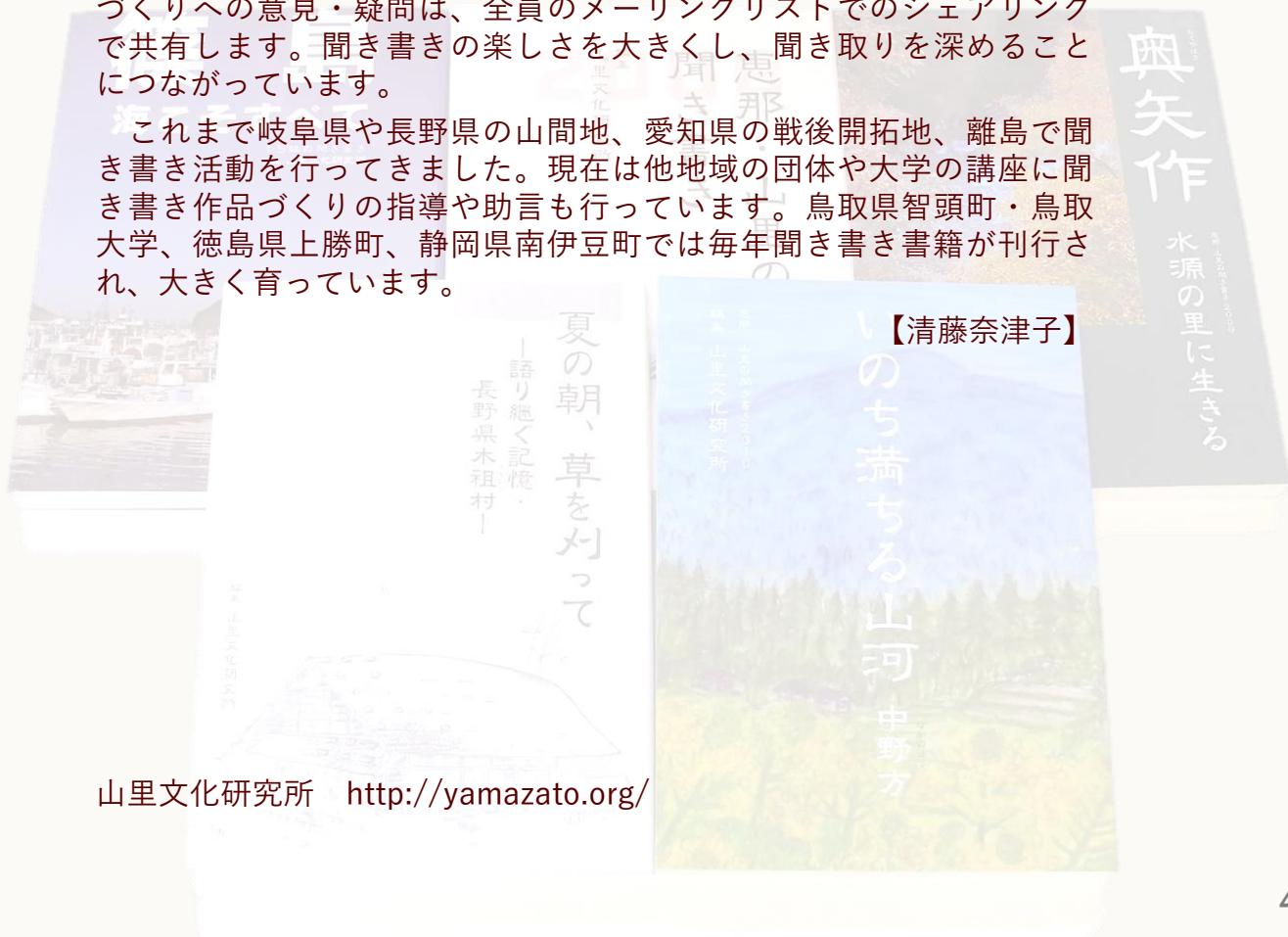
まず、最初の研修会では、模擬聞き書きを実施します。1人のお話を、3~4班に分かれてそれぞれ作品に仕上げます。同じ話が全く別の作品になります。そこから、他班の作品から啓発を受けたり学んだりします。



聞き書き作品の編集の途中で、1、2回の読み合わせ会を行います。参加者全員の作品を読み合い、意見交換します（この時、批判や欠点指摘をしないことがルール）。書き方を参考にだけでなく、他の人の作品を通じて地域全体を知ることができます。

そして、聞き書きで体験したこと、地域で見聞きしたことや、作品づくりへの意見・疑問は、全員のメーリングリストでのシェアリングで共有します。聞き書きの楽しさを大きくし、聞き取りを深めることにつながっています。

これまで岐阜県や長野県の山間地、愛知県の戦後開拓地、離島で聞き書き活動を行ってきました。現在は他地域の団体や大学の講座に聞き書き作品づくりの指導や助言も行っています。鳥取県智頭町・鳥取大学、徳島県上勝町、静岡県南伊豆町では毎年聞き書き書籍が刊行され、大きく育っています。



山里文化研究所 <http://yamazato.org/>

CASE-5

豊田市史編纂事業の聞き書き

愛知県豊田市では、平成19年度から平成28年度まで「新修豊田市史」編さん事業の一環で聞き書きを実施してきました。対象地域は旧豊田市域（挙母・高橋・上郷・高岡・猿投・松平地区）と平成17年に新たに合併した地域（藤岡・小原・足助・下山・旭・稲武地区）です。

昭和30年代以前のムラのくらしと高度経済成長期以降のムラのくらしの変化に重点をおき、生業、衣食住、社会生活、人の一生、年中行事、信仰、民俗芸能、トヨタ自動車、加茂蚕糸、日系ブラジル人の生活について聞き書きしてきました。区民会館に話者10名と調査者10名ほどが集まっておこなう合同調査と、話し手宅に出向く個別調査を実施しました。

聞き書きをした話し手はのべ1500人以上にもものぼります。話し手さんの中には、何度も足を運び、自宅に迎えてくださった方もいます。そのうちの御年90歳になるIさん宅には、何度も足を運んで貴重なお話を聞き書きしました。調査が終わって数日すると、Iさんから電話が入り、Iさんのご自宅にお伺いし、2時間ほどお話をお聞きする、ということは何度も繰り返しました。

ある日お伺いすると、「粕谷さんは私の歳の離れた友人だと思っている」と言ってくださいました。また、Iさんが取り組んでいるお花の展覧会の招待券を年1回届けてくださったり、市史講座にも足を運んでくださったりしています。話者と調査者という関係を超え、信頼関係が構築された世代を超えた交流が生まれたといえるでしょう。こういった話者の方は何人もおり、まさに聞き書きが新たな交流を生む貴重なきっかけになっています。

聞き書きした内容は、『新編 豊田市史 別編 民俗I～III』に主に収録され、調査ごとに話者ごと、項目ごとにデジタルデータ化していますが、実は音声データはほとんどありません。調査中に取ったメモをもとに調査報告を作成して、話者に返送します。話者は朱書きした調査報告を郵送して来たり、編さん室を来訪したり、電話をして加筆修正します。そのようなやりとりを通して、Iさんのように何度も行き来する話し手が増えてきたのです。

【粕谷亜矢子】



豊田市史編さん室

http://www.toyota-rekihaku.com/shishi/f_shishi.html

CASE-6 桑名市の 石取祭調査と聞き書き

三重県桑名市では、平成14年度から平成17年度にかけて「春日神社の石取祭総合調査」事業を実施し、平成18年3月には『桑名石取祭総合調査報告書』を刊行しました。その中で43町ある祭り町内の聞き書き調査を行っています。調査員は平常時25名で、祭りの3日間は多い時で100名を超えました。

しかし、この調査事業で実施した聞き書きは、現在桑名市にはデータとして残っていません。調査中に調査員に聞き書きデータの提出を求めなかったこと、調査に同行していた担当（粕谷）が聞き書きをまとめる時間がとれなかったためでした。

この調査事業の大きな目的は、当時県指定であった春日神社の石取祭を国の重要無形民俗文化財にすることであり、その目的は平成19年に「桑名石取祭の祭車行事」という名称で国の重要無形民俗文化財となったことで達成することができました。しかし、調査報告書に掲載した聞き書きの根拠は桑名市には残っておらず、調査者か粕谷の手書きノートしかありません。ノートは退職時に桑名市に置いていこうとしましたが、同僚の学芸員から「粕谷の手書きノートは粕谷の財産だから、自分で持っていけ」と言われました。

この桑名市での聞き書きは現状では復元困難で、何十年か経った後に疑義が生じる事態となっています。このような事例は、各地の「聞き書き」の実践においてもよく見られることでしょう。

この反省を踏まえ、豊田市では着任時にすでにファイルメーカーで聞き書きのデータ化がされていたので、それを増強し、どんな些細な情報でも記録するようにしています。

【粕谷亜矢子】

CASE-7

愛知県高浜市誌の聞き書き



愛知県高浜市では、2018年現在、約40年ぶりとなる市誌の編纂事業が進められています。その大きな特徴は、市民参加型の編纂だということです。市民が調査員として、資料提供者として、そして語り手として主体的に参加することで、市民が作り出してきた歴史や生活を、これからの市民に伝えていく形にしていこうとしています。

高浜市では、2014年度から「タカハマ！ まるごと宝箱」という、市の歴史・伝統・文化・産業・自然の魅力や自慢を掘り起こしていこう、という事業が実施されていました。その一環として、2015年度に、名古屋市立大学人文社会学部の大学生・大学院生が、高浜市の瓦産業について12名への聞き書きを実施し、冊子『たかはまとかわら』として刊行されました。

これらの成果をもとに、今回の高浜市誌にも「聞き書き」がとりいれられることになりました。「語り手」は高浜市のそれぞれの地区の歴史や生活を知る市民の方々、「聞き手」は、名古屋市立大学の大学生と、やはり高浜市のことをよく知る市民のチームとなって実施しています。また、市民の方々が自分で集められていた資料が提供され、市の資料室に「死蔵」されていた多くの資料を確認する機会が得られるなど、地域のもつ「財産」を洗い出し、見直すきっかけとなっています。

2017年度に実施された「聞き書き」の成果は、市誌の資料集として、一足先に2018年3月に刊行されました。

【佐野直子】

高浜市（2016）『100年先の子どもたちへの贈り物① たかはまとかわら』

高浜市（2018）『新編 高浜市誌 資料① 吉浜の養鶏・高取のくらし』

CASE-8

被災地での聞き書き活動から

東日本大震災の激甚被災地のひとつ、岩手県陸前高田市に得たご縁で、2011年12月から玉川大学太田ゼミでは、ゼミ生と聞き書き活動を通じた交流活動を展開してきました。

震災直後の活動では、膝を交えてお話を伺うなかで、つらい悲しい思いを抱える被災者同士はお互いを思いやるが故に、その気持ちを胸にしまい込んでいることに気づきました。住民同士では語られない無念、悲嘆、悔しさを、見ず知らずの学生が、時には涙を流しながら聞き取りました。

被災体験のない若者にだからこそ、伝えたい

という思いが、次々と吐露されていきました。

「話をしたらその晩からぐっすり眠れた」「自分の生きた証」「心に残るふるさとの記録」「子や孫に残したい宝物」と喜ばれ、交流を重ね「津波のおかげであなたに出会えた」とまで言ってもらえるようになりました。その成果は、『被災地の聞き書き101』として刊行されています。被災者ではない学生だからこそできる活動が、「聞き書き」であると再確認し、その後「防災の知恵袋」「高田から未来へのメッセージ」などをテーマに聞き書き活動を続けています。



学生たちも、話し手の郷愁、復興に寄せる想い、自然や地域、仲間に感謝する気持ちに胸を打たれ、翻って自分の地元で思いを馳せるようになり、「将来は自分の地域で活躍したい」という意欲も芽生えました。その後も仮設住宅の夏祭り復活のお手伝いや、浜・農作業体験等を通して交流を重ねています。

しかし、震災から数年を経て「いつまで私たちは被災者と呼ばれるのだろうか」という声が聞こえ始めてから、語りたい、学生と交流したいというニーズが減ってきたことを肌で感じています。そこで、2015年からは活動を「私たち（学生）目線」に方向転換し、「私たちが五感で感じた陸前高田の魅力を発信」するための「魅力冊子」を作成、現地へフィードバックすると共に、東京での発信活動に軸足を移しました。民泊先のご家庭の特産品（海・農産物、果物、おやきなど）を仕入れ、特別メニューを開発し学食で提供する「陸前高田の味力」フェアを、2016年から学生たちが企画実施しています。



これらの一貫して継続した活動は、学内外からの注目を浴び、それが学生たちのやりがいや励みになっています。

【太田美帆】

東京財団×共存の森ネットワーク（2012）『被災地の聞き書き101：暮らしを語り、思いをつなぐ。』大修館書店

2011年度と2012年度、名古屋市立大学人文社会学部の授業で「60歳以上の話者に高度成長前後の食生活の変化について訊く」との課題を課しました。名古屋という地域性でしょうか？ ほとんどが自宅もしくは近所で暮らす祖父母へのインタビューとなりました。

そもそもの関心は、「東海地方の鯨食慣行」にありました。もちろん、捕鯨問題については、授業で論じたうえでのことです。

結果は、想像していたとおりでした。東海地方には鯨食文化がそれほど根づいておらず、ほとんどの語りが「戦後直後の『まずい』、『くさい』」といった記憶だったからです。おそらくは、肉ではなく油目的で捕獲したマッコウクジラを食べていたのでしょう。

なかでも印象的だったのは、高度成長期に福岡から移動してきた男性が「九州のクジラは旨かった」と回顧する語りです。九州北西部は江戸時代からつづく「伝統」的な鯨食文化が根づく土地柄です。多様な鯨種と部位が流通しているだけでなく、それぞれを美味しく調理する知識と術も共有されていたわけです。

以来、「鯨食は日本の国民文化とはいえないが、日本には鯨食文化を継承する地域がある」との念を強くしています。地域史の個別性を無視した「捕鯨文化」論は、政治性が強調され、かえって捕鯨問題を複雑にするばかりではないでしょうか。

生活にまつわる具体的なエピソードを収集し、食生活の変遷を日本と世界の変化と関係づける方法を、わたしは「食生活誌学」と呼んでいます。魚食・米食も同様ですが、とかく政治性をおびがちな「食」のあり方だからこそ、理念ではなく、実態からせまりたいと思います。聞き書きは、その有効なツールであると確信しています。のみならず、教育と研究を両輪とする大学ならではの、すばらしい資源ではないでしょうか。

【赤嶺淳】



- 赤嶺淳編（2011）『クジラを食べていたころ』グローバル社会を歩く研究会・新泉社
赤嶺淳編（2013）『バナナが高かったころ』グローバル社会を歩く研究会・新泉社
赤嶺淳（2017）『鯨を生きる～鯨人の個人史・鯨食の同時代史』吉川弘文館

CASE-10

「おきひゃく」プロジェクト



2012年度から、島根県隠岐郡海士町で、「隠岐の100人」、略して「おきひゃく」を実施しています。海士町を中心とした隠岐の人びと100人の聞き書きを目標としたものです。

海士町は、人口2300名程度の小さな自治体ですが、全国からユニークな人びとが集う1ターンの町として有名です。離島というハンデを逆手にとったまちづくりが推進されています。

聞き手は、ボランティアな大学生。コーディネーターには、海士町でひとづくりをおこなう株式会社巡の環にお願いしています。1人の話者に学生3名がチームを組み、90分～120分のインタビューをおこないます。インタビューには質問項目を考えて臨みますが、役にたたないことがほとんどのようです。海士の人びとが伝えたいことを聞くのが一番のようです。

海士町ではトランスクリプトまでを作成しますが、慣れない作業に泣きそうになる学生もいたりします。トランスクリプトを作成するかわら、自分たちが感じた話者さん像を、話者さんの前で発表します。

編集は、大学でおこないます。おなじ話を聞いたはずなのに、聞き手によって話の山がことなったりするのは、面白いことだと思います。聞き手間で解釈をぶつけあい、共同作品として話者の個人史を執筆します。

話者さんに読んでもらえるには、どうしたらよいか？ 話しことばと書きことば、方言と共通語、漢字とひらがなのバランスなどを徹底的に議論し、編集します。「学生だから」といった甘えは厳禁です。やる以上は、読み手を意識した語りを目指します。そうして刊行された『海士伝』『海士伝2』『海士伝3』は、海士町の図書館でもっとも借りられる本となっているのだそうです。

「毎年5人、20年間で100人」との皮算用もむなしく、諸般の事情から22本の個人史で足踏みしています。そろそろ再開したいと機会を模索中です。

【赤嶺淳】

赤嶺淳監修、阿部裕志・祖父江智壮編（2013）『海士伝 隠岐に生きる』
グローバル社会を歩く研究会・新泉社

赤嶺淳監修、株式会社巡の環編（2014）『海士伝2 海士人を育てる』
グローバル社会を歩く研究会・新泉社

株式会社巡の環監修、赤嶺淳・佐野直子編（2015）『海士伝3 聞き書き
海士に根ざす』グローバル社会を歩く研究会・新泉社

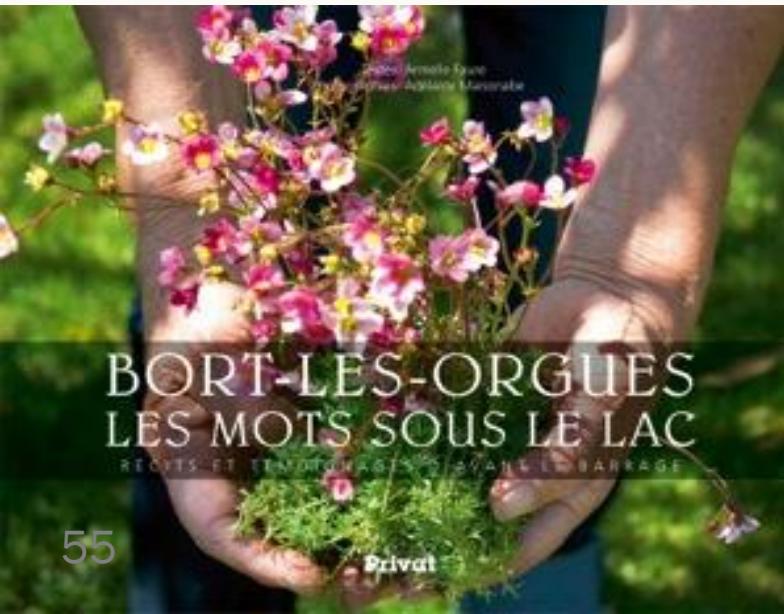
CASE-11 消えた共同体の記憶

近代の経済成長の陰で、大規模開発は環境の変化、住民の立ち退きや共同体の喪失を世界各地でもたらしてきました。現在、そうした事実は忘れられつつあります。

立ち退きの前の生活の記憶を収集し、残そうとするプロジェクトとして、フランスの中央部を流れるドルドーニュ川の「100人の証人」が立ちあがりました。フランスの人類学者アルメル・フォルさんを中心とした、地元の県立公文書館、そしてフランス電力会社EDFの共同プロジェクトです。

大きなものだけで5つのダムがあるドルドーニュ川では、その中でも最大のボール・レ・ゾルグダム建設に伴い、18の村々が湖に沈みました。現在あちこちに離れて暮らすかつての村の住民100人をたずねて聞き書きをおこない、写真や地図、その他資料などを住民から借りてデジタル化しました。

聞き書きでは、第二次世界大戦中はレジスタンスの活動の場でもあったコレーズの深い森、マスがよく獲れ、河川舟運の盛んだった川沿いの町の暮らし、ダム工事現場の様子、そして、ダムの底に沈むことになった村の住民の、「家」への深い愛着などが語られました。





2012年に、ポール・レ・ゾルグダム完成60周年を記念して、100人の証人のなかから31人の記録をもとにした*Bort-Les-Orgues: les mots sous le lac, récits et témoignages d'avant le barrage*『ポール・レ・ゾルグ、湖面の下のことば―「ダム以前」の物語と証言』が、美しい写真入りの大型本として刊行されました。また、2015年7月に、ドルドーニュ川のダムの一つであるシャスタンダムに隣接して新装オープンしたEDFセンターでは、発電の仕組みやダム建設の歴史だけでなく、「100人の証人」の一部を音声で聞くこともできるようになっています。

2015年に完了したプロジェクトは、現在カタログ化され、実際の音声はカンタル・コレーズ県立公文書館のサイトで聞くことができます。

【佐野直子】

「ダムと住民：ドルドーニュ川と5つのダムの100人の証人」

http://www.archives.cg19.fr/telechargements/FRAD019_BIB_4_2112.pdf

佐野直子 (2016) 「(書評) Armelle Faure, *Bort-Les-Orgues: les mots sous le lac, récits et témoignages d'avant le barrage*」『人間文化研究所年報』11:58-60.

CASE-12 地域社会にとって ダムがつくられるということ

御母衣（みぼろ）ダムとは、1961年に完成した戦後日本を代表する発電ダムの一つです。岐阜県飛騨地方、世界遺産で著名な白川村と荘川村（現在は高山市の一部）のちょうど村境に築造されました。戦後日本は復興を目指すにあたって資金不足だったため、東海道新幹線や名阪高速道路などのインフラ建設に世界銀行からの借款を利用しましたが、御母衣ダムはその31ある世銀支援のうちの1つでもあります。

さて、このダム建設は、地域住民や移転者らに一体どのような意味をもったのでしょうか。半世紀の時間を経て検証するためにインタビュー記録を編集したのが浜本篤史編（2014）です。

御母衣ダムといえば、今も地域のシンボルとして湖畔で花を咲かせている「荘川桜」がよく知られています。高碓達之助（電源開発株式会社初代総裁）の提案により、水没予定地にあった二本の老桜が移植されたことは、奇跡のストーリーとして、多くの小説やテレビ番組の題材として取り上げられてきました。他方、激しかった反対運動の記憶は薄れつつあります。



グローバル社会を歩く®

発電ダムが 建設された時代

聞き書き

みぼろ
御母衣ダムの記憶

浜本篤史 編

グローバル社会を歩く研究会

発行：新泉社

本書では建設当時に旅館女将、小学校教諭、配送業者、用地職員だった「目撃者」、東京や名古屋へ移転した「移住者」の計9名が登場します。この9名の「語り」を通じて、ダム建設がやってくる前はどのような生活文化があったのか、またダムがもたらした地域社会・住民への影響はいかなるものだったのか、これらがその時代状況とともに浮き彫りになっています。

また、1,346名の立ち退き移転者は、岐阜県内のみならず名古屋や東京の繁華街へ移転した方もいました。移転後の暮らしは人さまざまですが、本書では銭湯、アパートやホテル経営などを通じて生活再建を果たしたことが描かれ、ダムによる移住を「成功体験」としておおむね認識していることも明らかになっています。

「語り」による証言は、「開発の時代」を賛美するためでも、単にノスタルジックな感傷に浸るためのものでもありません。公共事業の中長期的な影響とはどういうことか、私たちに教えてくれるものは大きいでしょう。

【浜本篤史】

浜本篤史編（2014）『発電ダムが建設された時代 聞き書き 御母衣ダムの記憶』グローバル社会を歩く研究会・新泉社



CASE-13 聞き書き的な手法を用いた 映像展示の作成－滋賀県立琵琶湖博物館－



琵琶湖博物館のリニューアル（2016年）に伴い作成した新展示「私の暮らし・地域の未来」。映像版の聞き書き、とも言えるものが出来上がりました。

滋賀県立琵琶湖博物館は、琵琶湖のほとりに建つ「湖と人間」をテーマにした総合博物館です。化石、古文書、生きた淡水魚など、琵琶湖に関する様々な展示が並びます。現在の琵琶湖を扱うC展示室の「私たちの暮らし」コーナーでは、昭和39年の彦根市の農家の暮らしの再現展示を軸にしながら、過去50年ほどの間に、暮らしの当たり前や身近な風景が大きく変わってきたことを紹介しています。滋賀に暮らす一人ひとりの生活が現在と未来の琵琶湖地域のあり方に繋がっていることを伝えたいと作成したのが、身近な自然へのかかわりを感じながら暮らす地域の方の語りを集めた映像展示です。

展示の作成は、お話しいただく地域の方、博物館学芸員（私）、映像制作会社とで進めました。私と地域の方とで事前にお話をしたうえで、撮影当日は、カメラマンさん、音声さん、照明さん、ディレクターさんと一緒に、現場へ向かいます。集落の神社、実際に住まわれているお宅、漁港などで、私のインタビューに答える形でお話をして頂き、その間カメラは回しっぱなしにしました。編集にあたっては、インタビューの内容をまず全て文字に起こし、内容ごとに分類して小見出しを付け、使用する部分を抽出する作業を行いました。振り返ってみると、まずは文章版の聞き書きを作成し、それをもとに映像版の編集をするという作業でした。



出来上がった映像は、それぞれの方が暮らしや実践を通して感じてきた環境への思いを、その人の語り口のまま伝えられるものとなりました。内容に関連する写真や動画、字幕を映像に挿入することで、お話の内容を理解しやすくなっています。ご来館の際には、ぜひご覧ください。

【大久保実香】

CASE-14 聞いたお話をもとに展示を作る －琵琶湖博物館はしかけ暮らしをつづる会－

琵琶湖博物館はしかけ「暮らしをつづる会」では、滋賀県甲賀市信楽町多羅尾でおきた大水害について、体験した地域の方からお聞きしたお話をもとに、2016年8月1日から27日に「多羅尾大水害－水害から63年、語りつぐ記憶－」展を開催しました。

琵琶湖博物館では、館の理念に共感する市民が様々な活動に参加しており、これを「はしかけ」制度と呼んでいます。はしかけグループの一つである暮らしをつづる会では、地域のご長老の皆さんに琵琶湖地域のかつての暮らしの記憶をお聞きしてまとめる活動をしてきました。



滋賀県甲賀市信楽町多羅尾を訪れた際、地元の方が熱心にお話して下さったのは、昭和28年に起こった大水害のことでした。忘れることのできないつらい記憶ではあるけれども、それを知らない若い世代や子供たちにも知ってもらいたい。そんな地元の方の思いに触れ、多羅尾の皆さまから聞かせて頂いたお話を、琵琶湖博物館内の「集う・使う・創る 新空間」で展示することにしました。

多羅尾の皆さんにご協力いただき、生き生きサロンなどの場で当時の大水害を経験された方々からお話をお聞きしました。当時の記録写真のパネルを見ながら、実際のその時の状況をお聞きしました。展示では、聞き取った印象的な言葉と、記録写真とを合わせて見られるようにしました。また、多羅尾小学校での水害の記憶を引き継ぐ取り組みについても、児童が作成した制作物を展示するなどして紹介しました。

水害のこと、語り継がんとね。ただ思い出すのはしんどい。今でも思い出すとしんどくなるよ。テレビで災害のニュースを見るやろ、被災した人達の気持ちを考えると胸が苦しくなる。どんな気持ちやろてな、同じようなことやもんな。

でも語り継いでいかんとあかん。

聞いてくれてありがとう、ほんまに嬉しかった。

多羅尾の皆さんの記憶を語り継ぐ取り組みはまだまだ続きます。その取り組みの記録は、これからの私たちが、災害を防ぎ、また災害を乗り越えていくための、ヒントになるのではないのでしょうか？

【中尾京子・大久保実香】

CASE-15

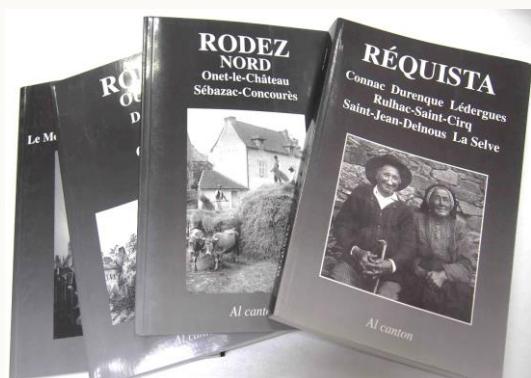
少数言語と文化の記録と活用

世界には、消滅の危機に瀕する言語が2500あまりもあるといわれています。そのなかで、南フランス全体で話されている（いた）オクシタン語という言語があります。

このことばの話者は住民人口の5%を切り、都市部では耳にする機会もなくなりつつあります。19世紀にこのことばの衰退が意識されて以来、辞書の編纂、伝統音楽や民話の収集といった保存が、個人や非営利団体によって進められてきました。20世紀後半になると、これらの蓄積がデジタル化されたり、公的補助によって整理が進められたりしています。

『昆虫記』のアンリ・ファーブルの故郷であるアヴェロン県は、オクシタン語文化がもっともよく残されている地域です。同県では、地元の文化団体によるプロジェクトがあります。その名も「アル・カントウン」（Al Canton）。ここには「炉端」という意味のほか、行政単位の「小郡で」という意味もこめられています。

1980年代末からはじまったこの活動の成果は、2000年以降数年かけて刊行されました。



アヴェロン県の各小郡ごとに1冊300ページにおよぶ地元資料をまとめるというものです（DVD別売）。日々の生活、農村の仕事、冠婚葬祭、歌や踊りなどについて50人～150人の「聞き書き」がオクシタン語で収録されています。



この刊行物の編集を手がけた人たちがメンバーとなり、1995年以来、アヴェロン県の中心都市ロデズで、Estivada（夏祭り）といわれる、オクシタン語文化をテーマにしたフェスティバルが毎年開催されるようになりました。

今では、オクシタン文化フェスティバルの中でも最大のものとして、県内からのみならず、県外のオクシタン語話者たちが集い、さらには内外からの観光客ものべ数万人が訪れるようになっています。

【佐野直子】

AL CANTON <http://www.ccor.eu/index.php/fr/livres/al-canton>



おわりに

社会調査をうんぬん論じなくても、地域にはすでにさまざまな活動が存在しています。また、語り部の活動や、「地元学」として定期的な学びの会を開いているところもあるでしょう。その中で、大学での教育・研究活動を中心に調査をしているにすぎない者が、このような冊子を作ることの僭越さに、ためらいもありました。

ただ、大学が「地域貢献」「地域連携」を求められる昨今、学生を地域社会の中に送り出すことが増える中で、地域の活動や潜在的な活力を目の当たりにする一方で、地域の悩みや課題も目にするようになりました。また、大学が地域にできる「貢献」とは何なのか、学生にとっても地域にとっても収奪的でないような「連携」とは何か、と自問することも多くなりました。

「聞き書き」が、研究と実践、地域と大学を結ぶ一つの方法であるのでは、と感じ、本冊子作成のキッカケとなったのは、2014年12月に名古屋市立大学で開催した「『聞き書き』を用いた地域づくりの可能性」セミナーでした。今回のコラムを書いていたいただいた赤嶺さん、清藤さん、吉野さんをはじめ、奄美群島文化財保護対策連絡協議会の中山清美さん、長年「聞き書き」を大学教育で実践している北海道大学の宮内泰介さんにご発表いただき、100人近い方々に参加いただけました。参加者の多くも地域で「聞き書き」的な活動を展開しており、関心の高さを肌で感じました。

そして、本冊子のコラム執筆や内容についての議論のために、2018年1月末に座談会を開催しました。コラムを執筆してくださった赤嶺さん、太田さん、粕谷さん、あすけ聞き書き隊の高木さんと河合友理さんにご参集いただき、名古屋市立大学大学院人間文化研究科「地域づくり」ユニットに所属する教員・研究員・大学院生のみにも開放したセミクローズドな形式でしたが、とても充実した議論ができました。孤立しているかのように思われた活動が、実はお互いにつながっていること、そしてそれぞれのアイデアや悩みは共有できることも実感しました。これもまた、「聞き書き」がキッカケで生まれたつながりであり、出会いであったと思います。セミナーと座談会に参加してくださった皆様に、この場を借りてあらためてお礼を申し上げます。

本冊子は、同じような悩みをもつ方々にとっての処方箋にはなりえない、きわめて暫定的なものです。本冊子がもし利用できるとしたら、「キッカケ」や「はじまり」にすぎないものと思います。それは、「聞き書き」それ自体が「はじまり」にすぎないのと同様です。

本冊子が何かの「はじまり」になるキッカケや参考になってくれることがあれば、望外の喜びです。

2018年2月 佐野直子 浜本篤史

参考文献

- 小田豊二(2012)『「聞き書き」をはじめよう』木星舎
桜井厚・小林多寿子編著(2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房
代田七瀬・吉野奈保子(2012)『聞くこと・記録すること—「聞き書き」という手法』SATOYAMA
イニシアティブ国際パートナーシップ事務局国連大学高等研究所
http://www.unesco-school.mext.go.jp/?action=common_download_main&upload_id=5766
中井浩一・古宇田栄子編(2016)『「聞き書き」の力:表現指導の理論と実践』大修館書店
名畑恵(2017)「若者のしなやかさが地域を変える——名古屋市錦二丁目長者町地区でのファシリテーション実践から」『社会教育』856:70-75.



本冊子は、文部科学省科学研究費(挑戦的萌芽研究)「『聞き書き』による着地型ツーリズムの可能性—愛知県高浜市の活動実践を中心に」(代表:佐野直子)による研究成果の一部です。

「聞き書き」で地域をつくる ～聞く人がいて、話す人がいる～

執筆・編集 佐野直子(名古屋市立大学)・浜本篤史(東洋大学)

コ ラ ム 赤嶺淳(一橋大学)・遠藤由美子(奥会津書房)・太田美帆(玉川大学)
粕谷亜矢子(豊田市史資料調査会)・清藤奈津子(山里文化研究所)
高木伸泰(あすけ聞き書き隊)・吉野奈保子(NPO共存の森ネットワーク)・
大久保実香・中尾京子(以上、滋賀県立琵琶湖博物館)・佐野直子・浜本篤史

イラスト 宮崎愛弓

レイアウト 河野芽衣

協 カ 市川哲・榎木美樹
(名古屋市立大学大学院人間文化研究科「地域づくり」ユニット)

発行日 2018年3月(1.1版) 2019年4月(1.2版)

発行 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 佐野直子研究室
〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑1
<https://www.region-ncuhum.com/>